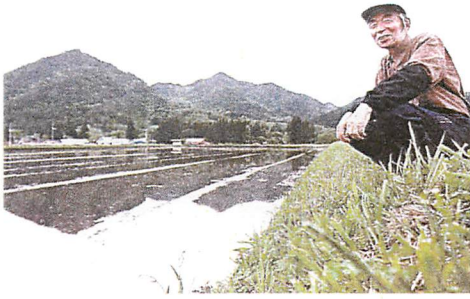


ほし・かんじ 1935年9月7日、山形県高島町生まれ。有機農業のほか、町おこしや教育でもリーダー的存在(写真は5月下旬、田植え前の田んぼで)



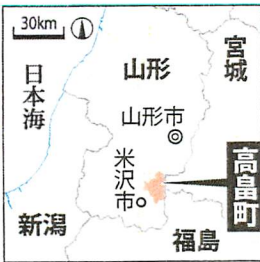
時代を駆ける

1 星 寛治

農の営みを通じ、人と自然、人と人の共生を考える山形県高島町の「まほろばの里農学校」が今年、開校20周年を迎えた。その原点は約40年前、全国に先駆けて有機農業に取り組んだ地域の若者たちのグループだ。先頭を歩んできた星寛治さん(76)は今、東日本大震災と原発禍に揺れる日本の再生は共生の理念によるしかないと訴える。

△自然の持つ本来の力で安全かつ高品質な農産物を作る有機農業。しかし、同じ自然が多くの人命と生活を奪った▽被災地の途方もない惨状を目の当たりにし、息をのみました。私たちは自然の恵みに生かされているが、その自然がひとたび牙をむけば、こんな大災厄をもた

「共生」で震災から再生を



らす。自然に対する謙虚さと畏敬の念を忘れてはいけないと改めて強く思いました。同時に、未来ある子供たちを含め多くの命と生活が奪われたことに衝撃を受け、しばらく虚脱状態でした。

△地震と津波に追い打ちをかけた原発事故。影響は高島町にも及んだ▽山形県内で放射能の影響は軽微でしたが、消費者の反応は厳しく、高島町でも産直契約が半減しました。消費者の不安

は当然で、私たちは生産者が検査データを示し、丁寧に説明しなければいけません。顔の見

える関係、生身の交流の大切さを改めて痛感しました。

△昨年7月に出版された「脱原発社会を創る30人の提言」に「原発と有機農業は共存できない」との一文を寄せた▽

原発事故後、福島県二本松市で有機農業を営む知人と電話で何度も連絡を取りました。30ほど前、私のところで研修した気骨ある農家です。彼は不屈の精神で放射能と闘っていますが、食の安全を目標してきた有機農家には最大のダメージです。原発事故は、科学技術の進歩や経済成長が必ずしも人間を幸福にしないことを示しました。本当に大切なこと、真の復興とは何かを考えなくてはなりません。

時代を駆ける

星 寛治 2



ほし・かんじ 山形県高島町在住。73年に同町有機農業研究会を結成。地域ぐるみで農法転換に取り組んできた(写真はあせ道の雑草を刈る星さん)

△就農したのは1954年、19歳の時だった。「もはや戦後ではない」の言葉が2年後の経済白書に躍る、高度成長へのとば口。農業界にも新しい波が押し寄せていた▽

その年の春、父が初めての耕運機を買ってくれました。農業の機械化が進み、農家が過酷な重労働から解放され始めた時代です。農業より青年団や文化サークルの活動に熱中していましたが、青年団の一線を退いた後は経営を真剣に考え始めました。コメと養蚕に2、3頭の乳牛を飼う小規模な複合経営でしたが、リンゴとブドウを植えて収入増を図ったのです。

△「農家の所得を他産業並みにする」とうたった農業基本法が61年に制定され、コメ中心の経営から果樹や畜産への

近代農法に抱いた疑問

転換、経営規模の拡大、機械化などが推奨された▽

所得向上のためには省力化を進め、生産性を高めなければいけません。農薬や化学肥料はその手段です。私もミスト(噴霧機)を背負って農薬をまきました。しかし、農薬散布後は頭痛や吐き気で寝込み、近所の人に作業を代わってもらったものです。周囲でも女性や子供、お年寄りたちが同じ症状に悩まされていました。

私のような虚弱体質でなくても、長い間には慢性中毒になるだろうと思います。化学肥料で育てた牧草を食べた牛が相次いで病気になり、子供時代から飼っていたコイが死んでしまったのもショックでした。

△米国の女性科学者、レイチェル・カ

ーソンが62年(日本語訳は64年)の著書「沈黙の春」で化学物質による環境汚染を告発。国内でも公害問題が顕在化していた▽

共同防除組合でブドウ栽培にスピードスプレーヤー(自走式の農薬散布機)を導入しましたが、作物の病気を防ぎきれず、71年には10年かけてようやく実を結ぶ時期を迎えたリンゴが病気で全滅してしまいました。早く収穫しようとして、堆肥のほかに化学肥料を施したために窒素過多になり、木に無理を強いたのでろうと思えます。生産、健康、環境の三つの側面から化学物質に頼った農法の限界を感じ「近代化」を超える方向を目指すべきではないかと考え始めたのです。

2012・6・20

ほし・かんじ 山形県高島町で
コメとリンゴを栽培。有機農業
の草分け的存在。76歳(写真はリ
ンゴの摘果作業をする星さん)



時代を駆ける

星 寛治 3

「農業や化学肥料に頼る農法に疑問を抱き、同じ問題意識を共有する仲間たちと各地を視察した。そこで出会ったのが、全国農業協同組合中央会出身で協同組合経営研究所理事長の一楽照雄氏。故人」らだった」

誰もが経済的に豊かな生活を追い求め、農家もスーパーで野菜を買うのが文化的と思いついた時代に、一楽先生は「このままでは農家は駄目になる。自給という原点を取り戻すべきだ」と力説されました。そして「農業や化学肥料をふんだんに使う農法ではなく、堆肥などの有機質を使って土の生命力を豊かにしなければいけない」とも言われました。

その言葉を聞いて、モヤモヤしていたものが吹っ切れ、目からうろこが落ちた

「土の力」を信じ実践へ

気持ちでした。

「71年、研究者や消費者運動の代表らが一楽氏を代表とする日本有機農業研究会を結成した。2年後には星さんら若手農家を中心に38人の高島町有機農業研究会が発足する」

リンゴ全滅の経緯がNHKの教育テレビの番組で取り上げられ、私たちも出演して自分の意見を述べました。一楽先生もそれを見て関心を持ってくれました。73年6月に高島町を訪れ、「一過性ではなく、実践的な農家の集団を作らなければいけない」と助言してくれました。そこで、9月に研究会を設立する運びになったのです。

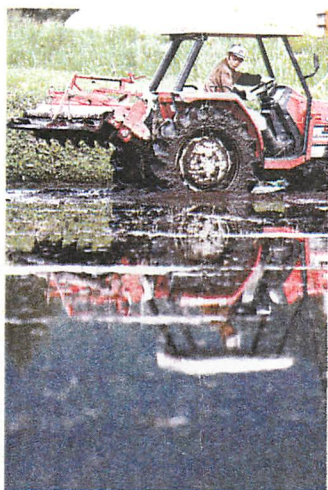
「会員たちは翌年、コメと自家消費用の野菜を有機無農薬栽培に切り替えた

が、高い理念とは裏腹に実践は厳しかった」

皆、どうにか親の許しを得て、田んぼ1枚や自給用の畑から取り組み始めました。肥料は完全に堆肥だけ、除草は人力の手押し式除草機で2回、更に四つんばいになっての手作業で2、3回といった具合です。ほうきで書虫を追い払ったりと、普通の10倍ぐらいの努力をかけた末に、収穫は平年の6割。2年目は干ばつも重なって散々な結果となりました。しかし、コメの品質は素晴らしく良くなりました。がっかりした反面、「農業や化学肥料を使わなくても、これだけのものができるんだ」という自信も湧いてきて、複雑な心境でしたね。

時代を駆ける

星 寛治 4



ほし・かんじ 山形県高島町で長年、有機農業を実践。著書に「農から明日を読む」(集英社新書)など(写真は田植え前の代かき作業をする星さん)

△73年に高島町有機農業研究会が発足したが、翌年、翌々年とも収穫は平年に比べ激減し、会員は、当初の38人から3年後には18人に半減した△

「家族の理解が得られない」という理由で続けられなくなる人が多かった。初めは許してもらえても、あまりの減収に耐えられなくなるわけですね。それでも残った18人は「3年目の正直」を信じて踏ん張りました。堆肥を増やしたり、菜種かす、米ぬかといった他の有機肥料を使ってみたりと工夫を重ねました。

△努力が実り、稲は途中まで順調に生育したが、この年は記録的な冷害に見舞われた△

8月までヤマセ(初夏に吹く冷たい北東風)が吹き荒れ、お盆を過ぎても稲穂

冷害克服で有機に確信

が出ません。皆無作(収穫ゼロ)を覚悟しました。8月末に夏らしくなって穂が出たが、低温障害で空っぽのもみが多いから、こうべを垂れない。この地方では大名行列になぞらえて「槍かつぎ」と呼んでいます。

いもち病(カビの一種による稲の病気)も流行し、収穫期になっても白茶けた風景が広がっていました。ところが、その中にポツリポツリと黄金色に実る田が現れた。それが有機農業の田んぼだったのです。私たち自身が驚きましたが、今まで「頭がおかしくなった」とか「嫁殺し農業だ」と笑っていた人たちが「奇跡が起きた」と不思議そうに眺めていました。

△冷害を克服した快挙は「複合汚染」を書いた作家・有吉佐和子さん(故人)にも称賛された△

結果的に会員の収穫はほぼ平年並みか、それ以上でした。有吉さんとお会いした時に「これは手作り稲作の凱歌ですね」と言っていたいただきました。一体、何が違ったのか最初は分かりませんでした。が、会員が有機の田んぼで泥の温度を測ってみたら、慣行栽培(農薬や化学肥料を使う普通の栽培法)の田より3度高かった。その後、ある講演会で土壌微生物学を専攻する京都大の小林達治教授に質問したところ「土中にいる微生物の生命活動が『土の体温』を作り出している」と教えてくれました。「我々の取り組みには科学的合理性があったのだ」と、確信を持てました。

ほし・かんじ 日本の有機農業の草分け的存在。山形県高島町在住。農業評論家、農民詩人として著書も多い(写真は田植えを控える稲の苗をなでる星さん)



時代を駆ける

星 寛治 5

「18人の若手農家による有機農業の実践は、76年の冷害克服を契機に次第に市民権を得ていく」

当時、私たちは三つの闘いを続けていました。一つ目は自分自身との闘い。農薬や化学肥料を使えばこんなに苦勞しなくて済みますから。二つ目は地域内のあるつれき。周囲から変わり者と見られ、有形無形の圧力があつた。三つ目は時の農政との闘い。国が掲げる近代化路線の逆をやるのですから。それが76年の冷害克服を境に変わりはじめた。80年前後は4年連続の冷害でしたが、高島町有機農業研究会の会員は平年並みの作柄を確保し「そういう方法でもやれるのか」と認めてもらえるようになった。

「次は個人が奮闘する「点」の営みを

地域に根を張る営みへ

地域ぐるみの「面」に広げていくことが課題となった

研究会発足から10年目の82年に日本有機農業研究会が主催する全国有機農業大会を高島町で開催することになりました。町の研究会は76年の18人から26人に増えていますでしたが、全国大会を担う力はありません。そこで行政、農協、商工会などの組織に働きかけて準備を進めました。大会には全国から約800人が参加し、日本有機農業研究会の代表だった一楽照雄先生や藤田和芳さん(現・大地を守る会会長)ら先駆者が熱い議論を戦わせた。地域に根を張る有機農業運動」というスローガンは私たちの問題意識そのものでした。

「根を張るきっかけは86年に浮上した

農業空中散布の阻止だった

空散は、国が進める近代化の一環として平野部から中山間地に及んできました。せっかく有機農業で生き物たちがよみがえってきたのに、空から農薬をまかれれば元も子ありません。この時は消費者やPTAなども動いてくれて、最終的に空散を中止に追い込みました。その年、農協青年部などが主導して新しい栽培基準で75戸の上和田有機米生産組合が発足したのです。ただ、組合では一回だけ除草剤使用を認めました。異論もありましたが、最初から高いハードルを設けるより「面」への広がり重視すべきだと考えたからです。結果的には、それが良かったと思います。

2012.6.23

ほし・かんじ 高島町は人口約2万5000人。農家約2000戸のほぼ半数が有機など環境保全型農業を営む(写真は80年代初め、消費者と日本人提供)



時代を駆ける

星 寛治 6

△山形県高島町は、産直提携という流通形態でも全国の先駆けになっていく▽
76年の大冷害克服で少し余裕が出てきたころ、東京や埼玉の消費者で作るグループが高島町を訪れ、私たちの田畑を視察しました。そして「自給目的なのは承知しているが、余った分があれば分けてほしい」と強く要請されました。それが出発点です。初めは野菜や果物を2トトラックに積み、東京や埼玉、神奈川方面まで持って行きました。東北自動車道が一部しか開通していないころ、片道で十数時間の道のりです。若さで乗り切りました。
△消費者グループの協力を得て、提携先は首都圏や関西圏、四国地方などにも広がった▽

86年の上和田有機米生産組合発足後は

広がる産直 原点は「自給」

消費者向けの産直だけでなく、生協や米屋、スーパーなども扱ってくれるようになりました。また、地元の造り酒屋や菓子メーカーとの取引も始まりました。地場産業との結びつきは大きな原動力になったと思います。1回だけ除草剤を使うので、価格は完全無農薬より60%当たり1万円ほど安くなりましたが、それでも2万4000円ぐらいと高めです。それを全量産直で引き取ってもらえるという幸運なスタートでした。

△組合の加入農家は当初の75戸から3年目には約130戸に増え、地域で大きな勢力になった▽

2、3年目からは消費者や販売店側から「完全な有機無農薬にも取り組んでほしい」という声が寄せられるようになり、

少しずつ切り替えが進みました。現在は組合の水田約60%の45%程度が完全無農薬です。これは長い間に土の力がよみがえってきたからで、自然な流れといえるでしょう。

88、89年には国立公書研究所(現・独立行政法人国立環境研究所)のスタッフが町を訪れて田んぼや川を調べましたが、農薬を使った場合と比べると「生き物たちの楽園」ともいえるような状態になっていました。

現在の有機農業は作物を高く売るためのビジネスのようになっていますが、私たちの原点は地域の環境と住民の健康を守ることであり、あくまで自給の回復であった点が大きく違うと思います。

2012.6.27 (水)

〔第3種郵便物認可〕

ほし・かんじ 山形県高島町で有機農業をリード。地域振興や教育行政にもかかわり続ける（写真は02年6月の「まほろばの里農学校」で本人提供）



時代を駆ける

星 寛治 7

△地域の環境を守ることから出発した有機農業は、国や大資本に依存しない地域の発展を目指す思想をはぐくんた▽

バブル経済末期には、高島町にもリゾート開発を狙う企業から農地や山林の買収話が持ちかけられるようになりました。そんなことを許せば、それまでの努力は水の泡です。上和田有機米生産組合を中心に、農業関係や福祉関係など多くの団体を結集して阻止しました。ブドウ園の一角に産業廃棄物の処分場を造る計画もありましたが、水際で白紙撤回させ、不法投棄された産廃も町を動かして撤去させました。

もちろん、高島のような中山間地は過疎化が深刻です。しかし、私たちは企業誘致など外の力に頼らず、地域の自然や

自立した地域目指して

風土、歴史を生かした「内発的発展」を目指そうと考えました。そのために町内のいろいろな団体に呼びかけて何度も会合を重ねました。町が作った振興プランと突き合わせ、将来ビジョンだけでなく、すぐにできること、すべきことを考えたのです。開発との闘いを通じて住民自身が学んだ方法といえるでしょう。農作業体験やフィールドワークを通じ、交流を深めた消費者や大学関係者らの助言も生きました。

△こうした経験を踏まえ、住民による自前の学習集団「たかはた共生塾」が90年に誕生した▽

89年にベルリンの壁が崩壊し、人類史が劇的な転換点を迎える中、真に自立した地域と人間らしい生き方とは何かを学

ぼうと考え、作ったのが共生塾です。初代塾長には町の助役退任後もボランティア活動に心血を注いだ鈴木久蔵さんが就任し、鈴木さんが亡くなった02年から04年までは私が後を継ぎました。

具体的には、環境や地域の問題を中心に多くの知識人、文化人を招いて公開講座やシンポジウムを開いてきました。共生塾の事業の一環として92年に開校した「まほろばの里農学校」では、塾生自らが講師を務め、地域外から参加した受講生らと体験を通じて学び合っています。古民家を改造した高島町和田民俗資料館を核に町が02年に整備した体験交流施設「ゆうきの里・さんさん」が役立っています。

ほし・かんじ 山形県高島町で有機農業を通じ、地域おこしや都市との交流に尽くしてきた(写真は97年9月、農業体験に訪れた学生たちと)―本人提供)



時代を駆ける

星 寛治 8

△高島町の有機農業は提携する消費者だけでなく、多くの若者を引きつけてきた▽

立教大の「環境と生命」セミナーで私が話した縁で、89年に十数人の学生が町を訪れ、農家に泊まり込んで農業体験をしました。立教大生によるフィールドワークは形を変えて今も続いています。交流は早稲田大、慶応大、明治大、千葉大、東京農大など十数の大学と高校や中学にも広がりました。中でも神奈川県立神奈川総合高校は17年間にわたり、研修旅行にきています。旅行先は複数から選べるのですが、40人程度の枠しかない高島に100人近い希望者が集まるそうです。

体験を契機に高島に移住する人も後を

開かれた交流の舞台へ

絶えず、現在は80人近くが住んでいます。農地や住居は「たかはた共生塾」や町の農業委員会があっせんしますが、最初から農業だけで食べていけるほど現実には甘くありません。まずは農業以外の収入源を確保し、自給的な農業から始めるよう勧めています。

△「環境」を基盤とする町づくりは学者や文化人にも高く評価された▽

学生との交流などが縁で大学教官とも親交が深まり、特に栗原彬・立教大名誉教授(政治社会学)とは、共同シンポジウムを開くなど強いきずなができました。栗原先生が町に寄贈された10万冊以上の蔵書は「たかはた文庫」として町民に利用されています。原剛・早大名誉教授が塾長の早稲田環境塾とも交流が深

く、それを踏まえた同塾の論文集「高島学」が昨年5月刊行されました。

高畑勲監督のアニメ映画「おもひでぽろぽろ」(91年)は東京で会社勤めをする女性が山形を訪れ、有機農業を営む青年に心ひかれる話ですが、モデルは高島の若者です。原作の漫画にない有機農業を登場させることで現代的なテーマに切り込み、高島で実際に青年たちの取り組みを見聞きする中からイメージを作り上げたそうです。

農村は閉鎖的と思われがちですが、消費者との提携に始まり、さまざまな人々と接することで、開かれた交流の舞台として活発に動き出した。それが高島の90年代だったと思います。